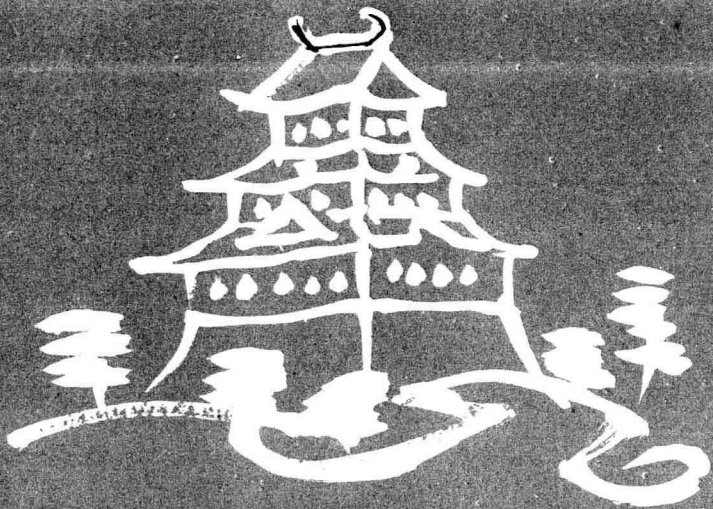






戰國祕卷

新潮社版



戰國秘卷(前篇)

昭和三十三年四月二十六日 印刷
昭和三十三年四月三十日 發行

定價 二六〇圓
地方 二七〇圓
賣價

著者 中山義秀

發行者 佐藤亮一

印刷者 曾根盛事

發行所 株式會社新潮社

東京都新宿區矢來町七一
電話東京(34)代表(七二一)(九
六二〇)(五)
振替東京八〇八番

亂丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

戰國祕卷（前篇）目次

姉妹……………	七
秋風に追われて……………	六
浪客……………	三〇
虎の餌……………	四
斷腸の一夜……………	三
草枯れなば……………	四
孤兒……………	五
かりがね……………	七
珠玉……………	九
神をまねる者……………	一〇
むら雲……………	一〇
凄風……………	三

榛名の露	一四
一代男	一五
闘魂	一六
秋夜怨	一七
處女の埋葬	一八
秋の夕暮	二〇
袋の鼠	二三
戰の虚實	三三
一節笛	三五
啄木の陣	三六
香爐上の雪	三八
一筋の征矢	三九

裝
幀
杉
本
健
吉

戰
國
祕
卷
(前篇)

姉 妹

一

天が高くなつた。

一塵もとどめない清冽な碧空に、山々がくつきりと全容をあらわしてくる。

東に近く、霧ヶ峰、蓼科、八ヶ嶽。

北に遠く、槍、穂高、西南へかけて乗鞍、木曾駒。

諏訪の湖にも、朝霧が深くなつた。霧は湖畔から隔たつた神の森や、社殿をもつつんでいる。

拜殿前の砂利の上に、姉妹ともみえる二人の若い女がひざまず跪いて何事か熱心に、祈願をこめてい

る。

彼女達を姉妹とすれば、姉は二十五、六、妹のほうは十八か九歳ぐらい。

姉は色があさ黒く丸顔で、豊かな兩頬に笑くぼでもできそうな、愛くるしい柔和さをたたえているが、妹は細面で顔だちがかなりきつい。

切長の目もとに、險がある。身體つきも姉にくらべて、どことなく骨ばつていた。しかし、とのつた品のよい顔だから、器量は妹のほうがすぐれているかも知れない。

二人とも葛布の小袖をきて、身なりは貧しかった。手甲脚絆、素足に足なかをはき、山家娘と

いつた風である。

彼女達は柏手をうつて禮拜を終ると、萱笠をかぶり竹杖をもつて起ちあがつた。夜のあけあけの暁時分といい、身仕度の物々しさといい、姉妹はよほど遠くから、夜道をかけてお詣りにきたものらしい。

「湖を見てゆこう」

妹が姉に云つた。湖はもと神社裏まで、ひろがつていたそうであるが、今は西北の方へかなり遠ざかつている。

二人は山際の道があるき、木立の側にたつて湖を眺めた。霧の下にほのかに水面が白く浮んでみえ、岸にうちよせるヒタヒタという水音が、聞えるような静さ以外、何の眺望もない。

しかし妹は、險のある目つきで食い入るように、いつまでも湖の姿をじつと眺めている。霧のはれあがるまで、待つているつもりなのであろうか。

「さア、もう歸りましょう」

姉がたまりかねたように、妹の手をひつばるが妹は動かない。姉はあたりを見まわし、聴き耳をたてて、

「あら、どつかで人が、^{いびき}軋をたてているような音がする。何だろう」

耳をすますと木立の中から、なるほど軋をかいているような物音が聞えてくる。しかし、まさか人間が寝ているわけではあるまい。

初秋に入つて、凌ぎよい季節となり、草をしとねの野宿も一興ではあるが、このあたりは人家が多く、^{はたご}旅籠に困るようなことはなかった。

うちつづく戦亂のために、神社の行事もどこおりがちとなり、毎年七月におこなわれる、御^み

射山やまの狩獵やまの神事も中絶して、鹿、野猪の類もふえてきているようだから、それ等が人里近くまで、まぎれこんできているのかも分らなかつた。

そう考えると、一層氣味わるくなり、

「さア、はやく参りましょうつてば。人に見つかるゝと悪いわよ」

姉はむりに妹の手をひいて、もと來た道をひつかえした。神社から安國寺へと、田野の間に部落がつづいてゐる。

ことに安國寺附近は、大町とよばれる町屋になつてゐた。そこに桶澤城という、大祝おほふりの城屋敷があつた。

大祝は諏訪上社の最高の地位にある者である。大祝の下に神長官、禰宜太夫などの五官がある。

諏訪神社の上社は、大國主命の次男、建御名方命たけみかたのみことを祭神とし、諏訪の下社はその妃、八坂刀賣やさかたのめ命を祭つてゐる。

神代の昔國譲りの際、建御名方命が天孫族の建御雷命たけみかすらのみことと力くらべして負け、出雲から諏訪のうみまでのがれてきた。

そしてこの地にとどまり、他所よそへは決して出ないということ、建御雷に誓約して、ようやく命を助けられた。

ところで大祝のいわれは、夢窓國師の推薦で、足利尊氏に仕えた諏訪圓忠の著作「諏訪大明神繪詞」によると、

「神明垂跡のはじめ、御衣を八歳の童男に、ぬぎ着せ給ひて、大祝と稱し、我において體なし、祝はよりをもつて體とすと神勅ありけり」

とある。これを「御衣みぎの祝いはり」といい、神勅による現神うつがみということになる。それで神氏を名のりその後胤が諏訪氏となつたわけだ。

姓氏と信仰を重々しくするための作爲で、もとよりあてにはなるまいが、諏訪氏がこの地方きつての舊族であることに、疑うたがひはないようである。

安國寺は百年前の長祿年間、諏訪信濃守政満が興した禪院の精舎。

政満の玄孫、安藝守頼重が天文十一年七月二十日、武田信玄のために、甲府で腹を切られ、諏訪家が一時はろんだ折、頼重の叔父、伊豆守新次郎滿隣が、この寺の正覺院にかくれて禪を修め、竺溪齋といつた。

この竺溪齋の次男頼忠が、いま諏訪神社の大祝になつてゐる。長男の越中守頼豐は、信玄の部將となつて、諏訪衆五十騎の旗頭だ。

諏訪家の一族で榮えているのは、この滿隣父子ばかり、あとは滿隣の兄薩摩守滿隆にしる、諏訪の本家筋にあたる高遠頼繼にしる、信玄にそむいて自滅してしまつた。

安國寺の町屋をすぎると、湖にそそぐ宮川が流れ、そのかなた、茅野の平原にのぞむ丘陵の盡頭に、上原の山城がある。

ここが諏訪郡の領主、頼重の本據だつた。鹽尻街道、北佐久への道、伊那道、甲州街道をおさえる要衝である。

頼重はこの城を守りかねて、背後の峰つづき桑原城にうつり、そこから甲府へつれて行かれて殺されてしまつた。享年二十七歳、彼の妻は信玄の妹であり、彼の娘は信玄の妾となつて、勝頼を生んだ。

上原城の麓の館には、いま板垣駿河守信方の弟、室住玄蕃允が郡代として住み、諏訪郡の統治

や軍事をつかさどっている。

大祝の居館も郡代の屋敷も、霧にぼかされてさだかには分らない。二人の姉妹はそれを幸いとするように、足ばやにそれ等の前を通りすぎてゆく。

彼女達は茅野の部落を流れる、上川をさかのぼつて奥へと進んでゆく。行手は蓼科高原か、役えんの行者とよばれる大門峠だ。

一里ほどゆくと、米澤という部落がある。その邊で、霧がうすれてきた。すると、今まで黙つてあるいていた妹が、

「山にのぼつて、も一度湖を見よう」

と云いだした。部落といつても、人家のすくない山村である。姉はうなずいて、

「此處なら、大丈夫。ゆつくり御覽なさい」

二人は道を横にきれて、山道を西にのぼつた。草むらの露がひどいが、一向氣にする模様はない。

半里ばかり澤道をたどると、北大鹽峠の頂に出る。海拔三千六百尺、いちめん平かな草野なだの原、ここは霧ヶ峰のながれである。

草野に腰をおろして、眼下に湖を見渡す。霧が水面から湧きたち、着物の裾をひるがえすような姿態を描きながら、空に靡き舞いのぼつてゆく。

「龍神が空に、昇つてゆくみたいね」

姉が妹に云つた。

「何處の湖にも、龍が棲んでいるそうだけれども、此處にはいないのかしら」

「何もいやしないよ。棲んでいるのは、雑魚ばかり……」

妹は嘲るように皮肉な微笑をうかべた。

「そんな惡口を云つて、じやア、なぜ二度も、湖が見たいなんて云うの」

「惡口じやないさ。事實じやないか」

妹の言葉つきが、だんだん男みたいになつてくる。姉はとりあわないで、

「でも、諏訪の湖は、明るいわ。甲州にもいろいろ、湖があるけれど。まわりが廣くつて、人々が住んでゐるし、美しい山々が、四方をとりまいてゐる。上の宮様と下の宮様と、こんな好い所を見つけたして、御夫婦で住んでおられた時には、さぞ楽しかつたでしようね。神代の頃つていわね」

「どうだか、わかるものか。やはり他人の國を奪ひあつたり、互に殺しあつたりしていたのであらう。此處の神も戰爭に負けて、遁げてきたのではなくて、出雲の國からひき離され、此處へ流されてきたものに相違ない。何處へも遁げださないことを條件にして、命だけ助けてもらつたにきまつてゐる」

姉は妹の顔を注視して、

「そうかしら」

「そうだよ。いつの世だつて弱い者は、強い者の云うことを、きかなけりやならないんだ」

「若しそうだとすると、上の宮様もお可哀想な方ね。この湖の水も、幽閉中に流された、神様のお涙かもしれないわ」

「やがてひあがつて、田圃になつてしまふよ。そして又奪合いははじまるのだ」

「いやだわ、そんなこと。水がひいたら、後に緑の廣々とした野原ができる。そして、くさぐさの美しい花が咲く。丁度、この山々のお花畑のように。今だつて、水の花だわ。あれ、あのよう

にキラキラ光つて、波の花がいつばい咲いている……」

二

霧がはれて、陽がのぼつてきた。その反映に照り輝く、水の舞踊に見とれていた姉は、ふと傍をかえりみて、妹が女の身のあられもなく、芝草の上に仰向けにひつくりかえり、陽光をふせぐように、両手で顔を蓋^{おほ}うているのに氣がついた。

姉は身をこごめて、彼女の手を顔からとりのけ、

「あら、あなた、泣いているのね」

それから片手を、相手の頸下へさし入れ、妹を抱きおこしながら、その口許へびつたりと自分の唇をおしつけた。

そのまま互にじつとしてゐる姿を見ると、姉妹同士のようにには思われない。愛人の間柄でなければ、そのような事はしないであろう。姉はしばらくして、口を離すと、

「あなた、國を離れるのが、悲しくなつたのでしょうか」

妹はおきなおつて、首をふり、

「そうではない。いろいろな事が、考えられるのだ」

今度はすつかり、男の口調になつてゐる。

「ではなぜ、お泣きになつたの」

相手はそれには答えないで、

「もう、あしかけ六年になるな」

「そう、妙香院様（勝頼の母）がお亡くなりになつてから、六年になります」

「あの人の計いで、一條の寺をお前と通げだしてから六年、はやいものだ」

「これからは月日が、もつと早くたちましよう」

「もう生涯、お前とは會えないかも知れぬ。飛びたつた雛鳥は、二度と古巢へ歸らぬというからな。思えば長い間、世話になつた。私は生れた年に父をなくし、翌年母も父の跡を追つてこの世を去つた。慈母の情を教えてくれたのは、お前ばかり、厚くお禮を申します」

相手は激しく、首を横にふり、

「いやいや、そんな事をおつしやつては。あなた様が御出世なされたならば、私は必ずお許へまいます。でも……」

そこで彼女は口ごもり、そのまゝうなだれてしまう。

「でも、どうしたのだ。私が出世するようなことはない。私は癡人だ」

「千代宮様」

彼女は相手の名を、はつきりと口にだして呼びかけ、

「世が世ならば、あなた様はこの諏訪郡のお殿様、私は妙香院様に召使われていました腰元。これまで表むきは姉妹、内證は夫婦同様にして暮してきましたが、それも今日かぎりでお仕舞です。明日あなた様がお旅立ちになられましたならば、私はひとりぼっちになりますけれども、お家のためには替えられませぬ。どうぞ癡人だなどとおつしやられずに、お身をたてて下さりませ。私も父母もそれを樂みに、これまでお護りしてきたのではござりませぬか」

「お由、それを云うてくれるな」

千代宮はいかにも、聞くのがたえがたいように、

「私はこのように女に身をやつして、世を隠れ忍んでいるのでもないかぎり、身の置き所のない